

懐徳堂文庫所蔵「象背宴集図」に見える西洋の影

湯城 吉信 (大東文化大学文学部)

The Shadow of the West in Zohaienshuzu (*Banquet on the back of an elephant*)

Yoshinobu YUKI

〔要旨〕

大阪大学附属図書館内の懐徳堂文庫に所蔵される伝岩崎象外筆・中井履軒賛「象背宴集図」は、巨象の上にあずまやが設けられそこで人がたたずむ様子を描いた絵である。この絵は、画風を見ても着けられた賛を見ても、いかにも東洋的な絵に見える。だが、履軒の兄竹山が書いた「象背宴集画記」を見ると、彼らが象の背中に櫓を設けて戦争に臨む様子を描いた西洋の画を目にしていたことがわかる。当時の大坂には西洋の文物が多く渡来していた。竹山が書いた「紅夷画帖記」には、豪商山片家が所蔵していた西洋の銅版画をまとめた画帖には象の背中に櫓を載せて戦っている図があったことが見える。これはおそらく象部隊を描いた西洋の銅版画であろう。本稿では、それがどのような版画であったか紹介も行った。同画に登場する望遠鏡についても懐徳堂の学者には言及がある。彼らの西洋に対する関心や接触は思いの外大きい。

〔目次〕

- はじめに
- 一、画賛の分析
- 二、中井竹山「象背宴集画記」
- 三、懐徳堂の学者の西洋科学への関心と接触
- 四、「紅夷画帖記」一櫓が載った象を描いた銅版画の存在
- 五、象部隊を描いた銅版画
- おわりに
- 注
- 参考文献

はじめに

大阪大学附属図書館内の懐徳堂文庫に、伝岩崎象外筆・中井履軒賛の「象背宴集図」という掛軸が所蔵されている⁽¹⁾(図1)。皮膚のたるんだ高さ十メートル以上はありそうな巨象の背中に四阿(あずまや)が設けられ、その中に六人の人が見える他、滑車を使って持ち上げられている人も見える。象の背中にいる六人の人は、柵に凭れて外を見たり(一人は望遠鏡で眺めている)、滑車で上がってくる人を見守っていたりする。象という画題はさておき、藁葺き屋根の素朴な四阿を見ても、人々の様子を見ても、自適の境地を表す、いかにも東洋的な画に見える。題の「象背宴集図」⁽²⁾も「象の背で宴会(楽しい集まり)をする画」という意味である。また、荒唐無稽な象の大きさも道家のスケールの大きなほら話を想起させる。

本稿では、同画の画賛や、懐徳堂の学者の文章を分析することで、同画が書かれた背景を探ってみたい。

一、画賛の分析

本章では、「象背宴集図」の画賛を分析したい。図1の上部に書かれている画賛は以下のようなものである(図2)。

或廬象背而不覆、或居平土而覆家。安危無常形、存乎其人。君若不解、仰問蒼天。

履軒幽人題 「戯」 「蝶」(朱文方印、逆捺)

この画賛は、中井履軒の漢詩文集『履軒古風』巻四に見え、題は「象」となっている。『履軒古風』では年代順に作品が収められているので、この賛は癸丑(寛政五年(一七九三))から丁卯(文化四



図1 伝岩崎象外筆・中井履軒賛「象背宴集図」
(大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵)



部分拡大図

年（一八〇七）の間に作られたものと推測できる。

文字の異同については、『履軒古風』巻四では、「覆」の横に「顛」と書かれ、「覆」の下の「家」は見せ消ちされている。すなわち、「覆家」を「顛」に直す推敲の跡が見える。

この賛の大意は以下のものであろう。

象の背中に庵を造ってもひっくり返らないこともあれば、平地に居てもひっくり返ることもある。安危は常に決まった形があるわけではなく、人によるのだ。もしあなたがおわかりにならなければ、仰いで天に聞かれよ。

この賛では、安定した生活が送れるかどうかはあなたの心次第だと言い、老荘的達観を示唆するかのようである。つまり、画風と同様、画賛も極めて東洋的色彩が濃いもののように見える。

二、中井竹山「象背宴集画記」

すでに指摘されている⁽³⁾ように、この画に関連する資料として、履軒の兄の中井竹山が著した「象背宴集画記」がある（『奠陰集（文集）』巻十一所収）。寛政六年（一七九四）の作である。

以下、「象背宴集画記」の原文を挙げる。改行は湯城による。

麗然象背、可以屋矣、可以欄矣、可以坐臥矣、可以燕賓矣、可以遠眺望矣、可以縋而升降矣。夫象巨形而多力、性善馴而無猛獠之氣。故殊域産象之地、蓋当有此設也。

予嘗閱紅夷図画、有象背架楼櫓以臨戰陣者。争鬪死生之際尚能爾、則燕閑暢適之時可知已。友人岩崎氏善画、一日意匠自運、以作斯図、可謂奇而不詭矣。列子称巨鼈*戴山、後人伝而図之、其説誕而妄。大象負屋、則信而有徵。伝曰、「古之愚也直、今之愚也許。」但此負戴二事、古詐而今直。

古人丘陵台榭之望、徒竭目力而止。後世繼之以蹻蹻*、遥山遠樹拳在几席。古者、縋唯単繩、攀援引挽、皆甚勞焉。後世設一機、而千鈞鎔銖、其伸縮由己而不由人。今画者収此二物、以供象背之用、智而不愚、予皆有取也。

〔注〕○鼈 鼈は『楚辞』「天問」第五段にも見える（「鼈戴山抃、何以安之」）（図3参照）。○蹻蹻 もともと雲が

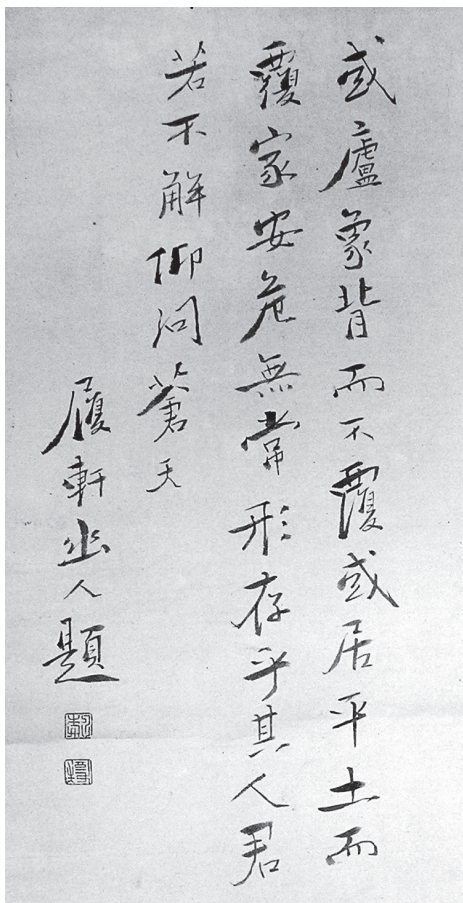


図2 「象背宴集図」中井履軒賛
（大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵）

太陽を覆うことを指す。後、眼鏡の別称となった。ここでは望遠鏡のことを指すのであろう（望遠鏡は「遠眼鏡（とおめがね）」と呼ばれた）。

（巨大な象の背は、庵を設けることも、欄干を設けることも、寝たり座ったりすることも、客をもてなすことも、遠くを眺めることも、縄に縋って上下することもできる。象は巨体で力持ちだが、性質はおとなしく獐猛さはない。だから、象を産する異国の地では、このようなことが行われることがあるのだ。

私がかつて、象の背中に櫓を設け戦争に臨む様子を描いた南蛮画（西洋の画）を見たことがあった。死生を分ける戦争においてもそうな（乗っていられる）のだから、それ以外の普段の落ち着いた時の様子は推して知るべしだ。友人の岩崎氏は画を善くし、ある日アイデアを得てこの画を描いた。奇にして偽りなしと言うべきであろう。『列子』（*「湯問篇」）には巨大な亀が山を載せる話があり、後世の人はそれを伝えて画にしている（図3参照）が、この話はでたらめである。だが一方、大きな象が庵を背負うことは事実で証拠もある。『論語』（*「陽貨篇」）に、「昔の愚者は正直であったが、今の愚者は人を欺す」と言うが、以上の亀と象の二事については、古のはでたらめで今のは当たっている。

昔の人は、高台や物見台から肉眼で見える範囲しか見ることができなかった。後世、望遠鏡が登場し、遠くの家や木も居ながら見えるようになった。昔は、縄一本に縋って登り、はなはだ骨が折れた。後世、機械（滑車）が登場し、重い物も軽い物も自分で自由に上下させることができるようになった。今この画ではこの二物（望遠鏡と滑車）を収めて、象の背中に配している。智にして愚にあらずだ、私は評価したい。）

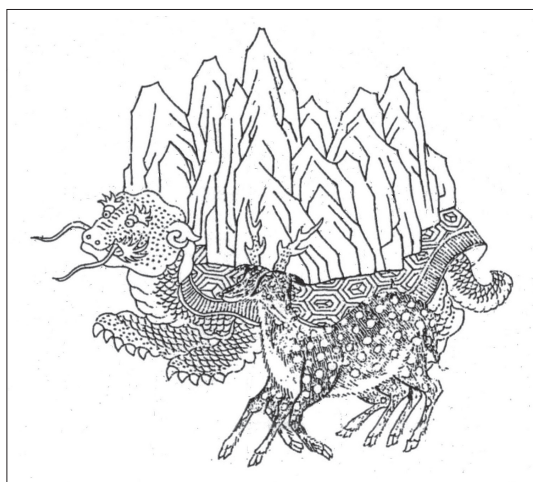


図3-1 龍図
 (『欽定補繪蕭雲從離騷全図』卷中所収)
 *この画では、前面下方に両頭八脚の鹿が重なっている点には要注意。

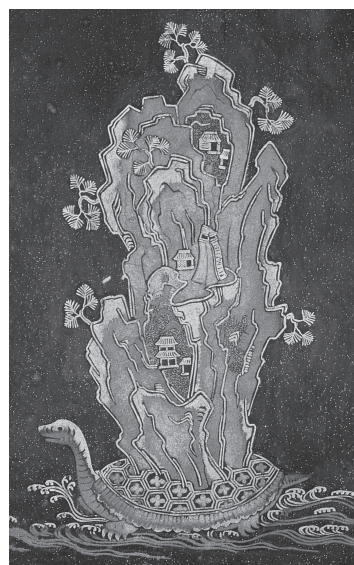


図3-2 龍図
 (東京国立博物館蔵「蓬萊
 蒔絵袈裟箱」)

この文章でまず注目すべきは、前段と後段の内容である。前段に見える庵や人についての描写も、後段に見える望遠鏡（眼鏡）と滑車についても、ともに図1の象図の様子と全く一致する。ここからすると、図1の象図は竹山が記を書いた「象背宴集画」であろうと思われる。そして、この画が本物であるとする、岩崎象外が描いた画に、竹山が記を書き、履軒が賛を着けたことになる（履軒賛と竹山記の年代も齟齬を生じない）。

次に注目すべきは、中段の内容である。竹山は象の背中に櫓を設けて戦争に臨む様子を描いた西洋の画を見たと言う。懐徳堂の御用絵師とも言うべき象外も同様の画を目にしてこの画の着想を得た可能性が高いだろう。この西洋の画については四章以下に詳しく述べたい。

また、竹山は、山を背負う巨大な亀（『列子』所載）はでたらめだが、この櫓を載せる巨象は根拠がありでたらめではないと言う⁽⁴⁾。尚古思想を奉じる儒者でありながら「このことについては、古が誤っており、今が正しい」と言うところに、新しい時代を否定しない竹山の思想を垣間見ることができる。そもそも、後段に見えるように、望遠鏡、滑車を描いたこの画は、最新技術を盛り込んだ、当時としては現代的な画であったのだ⁽⁵⁾。

三、懐徳堂の学者の西洋科学への関心と接触

懐徳堂の学者は西洋の文物や科学に興味を抱いていた。特に、中井履軒は、解剖図（『越俎弄筆』）や天文図（「木製天図」「紙製天図」「方図」）など、科学関係の作品を残している。筆者はすでにこれらの解剖図、天文図に間接的に西洋科学の影響が見えることを指摘した⁽⁶⁾。

その他、彼らが直接に西洋文物・科学と接していた例として、履軒の「顕微鏡記」と竹山の「応気箒銘並序」が挙げられる⁽⁷⁾。それぞれ漢文で、顕微鏡と温度計の様子を正確かつ詳細に記録している。

彼らの西洋の文物・科学への興味は、自身の旺盛な好奇心によるものであろうが、西洋の文物・科学に接しやすい環境が存在したことも大きい。

当時の大坂には西洋の文物が多く渡来していた。懐徳堂の竹山や履軒とも交流があった博物学者・木村兼葭堂や、竹山・履軒の弟子である山片蟠桃の山片家など、大坂の豪商は西洋の文物を多く所蔵していた⁽⁸⁾。

例えば、履軒の「顕微鏡記」の顕微鏡は木村兼葭堂と親しかった服部永錫に見せてもらったものであるし、竹山の「応気箒銘並序」には竹山がかつて兼葭堂に温度計を見せてもらったことが言及されている⁽⁹⁾。

四、「紅夷画帖記」—櫓が載った象を描いた銅版画の存在

画に関しても、山片家の所蔵品には多くの西洋画があったことが確認できる（注8参照）。そして、その画を懐徳堂の学者が目にしてきたことは、中井竹山が書いた「紅夷画帖記」（一七七五年）

(『奠陰集(文集)』卷九所収)から確認できる。以下、「紅夷画帖記」を紹介する。

紅夷人多巧智、凡器用機械之制、皆曲尽精妙、其於画図亦爾。模真写生、百物之向背陰陽以至日晷雲容月輝燭影、織悉不遺、可以為一奇矣。門人山片子衡、購得其小画三十八幅、実係印板、而刻亦精緻、不失毫釐。或云、「印材用銅、故彫鏤細微、匪梨棗之比。」但其包羅森密之過、物象膠轕*、形影紛錯、反致黝黯窒惑難辨、是可憾已。

〔注〕○膠轕 音「コウカツ(カウカツ)」。入り乱れる。

(西洋人は智慧があり、道具機械は精妙を極めている。画においてもそうである。実際の様子を如実に模写し、さまざまな物の向きや明暗(立体の様子)から日の影、雲や月や炎の様子まで、委曲を尽くしている。また奇事と言うべきである。門人の山片子衡(蟠桃の主人重芳か?)は、西洋の小さい画を三十八幅購入したが、実は印刷したものであり、精巧に彫られていて、全く違うところがない。ある人の話では、「印材に銅を用いているので、彫刻が細かく、木版の比ではない」ということだ。ただ、物事を描き過ぎており、物体が入り交じり、物の形と影も錯綜して、かえって黒くわかりにくくなっているのが残念である。)

以上から、西洋の銅版画三十八枚を帖物に仕立てた画帖が山片家に所蔵されていたことがわかる。続きを読もう。

按其画、戦争之状、十有二幅。火攻之状、三幅。刺客之状与発大砲*之状、各二幅。有格闘相殺之態。有病臥床之態。有病且死 又輿尸出葬之態。有投水者。有行刑者。有燔文書者。有嚇盧徒異獸者。或象背架戎櫓。或焚室下、有鼠成群而走。或投入于井中。或張燭作書記。或衆人席地而坐起、盤饌盈前。其餘七幅、不可猜何物事。

〔注〕○煩 大砲。懷徳堂遺書本は「幅」に誤る。

(その画を見ると、戦争の様子を表したものが十二幅ある。火攻めの様子が三幅、刺客の様子と大砲の様子を表したものが各二幅ある。(その他)格闘して殺し合う様、病床に伏せる様、病死して出葬する様、水に飛び込む様、刑罰を行う様、文書を焼く様、黒人の奴隷や獣を使う様がある。また、象の背中に戦いの櫓を乗せているもの、部屋の下を焼いて鼠が群を成して逃げているもの、人を井戸の中に投げ入れているもの、燭をともして書記しているもの、衆人が地面に蓆を敷いて座ったり立ったりして、ご馳走が並べられているものがある。その他の七幅は何の画か推測できない。)

ここで注目すべきは、それらの銅版画の中に、象の背中に櫓を載せて戦っている図があったことである。この後に、これらの銅版画についての山片子衡の説明が載せられている。

其既猜者、亦皆怪奇特異、往々不能得其所由矣。子衡言、「原有国字注記、偏画四辺及紙背。旁

行之体、固不可読、故皆割去、以為帖云。」其不留長物、固可。然既如此、則画中光景、雖質諸夷人、亦不可復知也。且画每幅孤行乎、将有前後次叙也。今信意為帖、其不可知也滋甚、要皆痴人夢中之見耳。

(その推測できたものもすべて風変わりでその背景は定かにはできない。子衡は、「もともとローマ字の注記が画の四周と裏にあったのですが、横文字で読めないので、全部切り取って、このような帖物に仕立てました」と言った。無用の物を留めないというのは結構だ。だが、このようにしてしまうと、画中の光景が何なのか、西洋人に聞いても知ることができなくなる。それに、画がそれぞれ独立したものなのか、関連してつながっているものなのかも、このように勝手に帖物に仕立ててしまうと、ますますわからなくなり、何を言っても痴人の戯言にすぎなくなってしまふ。)

この部分からは、山片子衡が横文字の意味が分からないという理由でもともと銅版画の周囲や裏にあった文字の部分を切り取ってしまったことがわかる。それによりこの画帖の画はそれぞれ何を表すものなのか、一連の作品なのか別々の画なのか、知る手掛かりをなくしてしまったことを竹山は責めている。いかにも実証的の学問をしていた懷徳堂の学者らしい批判である。この後には、西洋の戦争に対する竹山の興味深い推察があるが本稿とは直接関係しないので省略し⁽¹⁰⁾、次章ではこの象部隊の銅版画はどのようなものであったのか探求したい。

五、象部隊を描いた銅版画

本章では、前章で紹介した「紅夷画帖記」に登場する象の背中の上に櫓を載せて戦う様子を描いた銅版画とはどのような画であったのか探求したい⁽¹¹⁾。

この『紅夷画帖』も象の画も、残念ながら現在確認できる山片家の収蔵品目録(注8)の中には見当たらない。

象の背中の上に櫓を載せて戦うというのは恐らく象部隊のことであろう。日本の江戸期と同時期の西洋の銅版画は数多くあるので、筆者は探せば見つかるかと推測した。ただ、その探索方法を知らず長らく探しあぐねていた(ご存じの方がおられればご教示願いたい)。

そのような中、二〇一九年、中之



図4 「ザマの戦い」
(1602年・ローマ刊、42.2×54.4 cm) (香雪美術館蔵)

島香雪美術館で開かれた展示会「交流の軌跡—初期洋風画から輸出漆器まで」において以下の銅版画の存在を知った(図4)⁽¹²⁾。

この銅版画は『紅夷画帖』の象の画ではなかろう(大きさからして可能性が低い)。ただ、『紅夷画帖』に先立つ時期の西洋の銅版画であり、象部隊の戦争の様子を表すものであるから、『紅夷画帖』の象の画を彷彿とさせるものであることは確かであろう。以下、松田清氏の記念講演「典拠を読み解く—日欧交流史の背景」に基づき、図4、図5について紹介する。



図5 「レパント戦闘図屏風」(右半分)
(香雪美術館蔵、153.5 × 369.0 cm)
*第二扇(右から二つ目の部分)下の象が図4中央上の象と類似する。

松田清氏は、日本で描かれた南蛮絵画が依拠した西洋画を探求している(文献学で言う出典調べである)。そして、南蛮屏風「レパント戦闘図」(図5)の象部隊の部分は、一六〇二年にイタリアで刷られた銅版画「ザマの戦い(Battle of Zama)」(ジウリオ・ロマーノ原画、コルネリス・コルト彫版)(図4)をもとに描かれたものだという。絵柄の類似性からして極めて妥当な推測であろう。つまり、このような銅版画が日本へ到来していたことになる。

図5の南蛮屏風の題名に見える「レパント(Lepanto)の海戦」は、一五七一年に起きたギリシアのコリント口のレパント沖でのオスマン帝国海軍と教皇・スペイン・ヴェネツィア連合海軍との海戦である。この海戦は西ヨーロッパの軍隊がオスマン帝国に勝利を収めた最初の戦争とされる。

一方、図4の銅版画の題名に見える「ザマの戦い」は、紀元前二〇二年に北アフリカのザマで起きたローマ軍とカルタゴ軍の戦いである。大スキピオ率いるローマ軍がハンニバル率いるカルタゴ軍を破り、第二次ポエニ戦争の趨勢を決したとされる。

つまり、両画は、絵柄は類似するが、全く別の戦いを描いた画ということになる。これは欧文や西洋の歴史に詳しくなかった当時の日本人にとっては仕方のないことであろう(絵柄を参考にしたということを責める必要もない)。

なお、象部隊の画は、ゴットフリート『史的年代記』(Gottfrieds, *Historische Kronyck*, 再版はライデン・一六九八年、江戸時代の蘭学者が西洋の歴史を知る上で重要な役割を果たした)にも見える。これは紀元前二八〇年のラクレアの戦い(ローマ軍が初めて象部隊と戦って負けた)を描い

たものである。ただ、長崎のオランダ通詞吉雄耕牛の持っていた『史的年代記』（京都大学附属図書館蔵）からは多くの銅版画が切り取られている⁽¹³⁾。当時、銅版画が人気で、一方、文字は理解できなかったので、銅版画の部分だけが切り取られることがあったのであろう。このことは、四章で紹介した『紅夷画帖』の成立と通じるものがあり興味深い。

その他、象部隊については、林子平『海国兵談』（一七九一年）巻二「陸戦」にも言及されている⁽¹⁴⁾。江戸時代には象自体すでに日本にもたらされ人々の注目を集めていたが、その象を戦争に使う象部隊はさらにインパクトがあり特に人々の注意を引いたのであろう。

以上の図4と図5の画についての説明・関連記述はすべて松田清氏の研究によるものである。記して感謝の意を表したい。

おわりに

以上、本稿では、伝岩崎象外筆「象背宴集図」は、いかにも東洋的な画風と賛を有するが、実は象部隊を描いた西洋の銅版画から触発された可能性があることを述べた。この画の中に見える望遠鏡も、当時、西洋から精度の高いものが輸入されていた⁽¹⁵⁾。そして、こうした西洋の文物に懐徳堂の学者も直接目にする機会があった。「象背宴集図」にはそうした西洋の影を見ることができる。

ただ、同じ象を描いても、象部隊を描いた西洋の銅版画と「象背宴集図」では全く違う。穏やかな象の上で人がくつろぐ様子を表した「象背宴集図」は、西洋の象部隊の銅版画とは対照的に、換骨奪胎された太平の象であった。「象背宴集図」で竹山が岩崎象外の着想を評価したのはこのような点にあったのだろう。

注

- (1) 寺門日出男「中井竹山・中井履軒の贋作書画について」は「象背宴集図」は贋作だと言う。理由として、履軒の「蝶」「戯」の両面印が逆さに押されており、印影も本物とは違うことを挙げる。だが、筆者の実見では印が偽物だという判断はできなかった（ある学芸員の方の話では「逆さ印に贋物なし」という言い方があるようだ。ただし、それを逆手に取って逆さ印を押した偽物もあるらしく、印の順逆による真贋の判断は難しい）。この判断は後世に委ねたい。ただ、もし贋作であっても、このような象の画が存在し、履軒がそれに賛をつけていたことは確かである（本稿で紹介する関係資料から確認できる）。本稿でこの画や画賛の分析をすることには意味があると考える。
- (2) この題は、二章で述べる中井竹山「象背宴集画記」に基づくものと思われる。賛を載せる中井履軒『履軒古風』巻四に基づけば「象図」とすべきだろう。箱書きには「象外画象履軒幽人賛」とある。

- (3) 奥平俊六『懷徳堂ゆかりの絵画』八二頁。ただし、同書は履軒賛、竹山「象背宴集画記」とともに、翻刻および解釈に誤りがある。
- (4) キリンについて、伝説の瑞獣説を否定し、ジラフの存在を強調する説(大槻玄沢『蘭畹摘芳』)に通じる(湯城吉信「ジラフがキリンと呼ばれた理由—中国の場合、日本の場合(麒麟を巡る名物学 その一)」参照)。
- (5) 江戸時代の望遠鏡については、有坂隆道「岩崎善兵衛と望遠鏡—江戸時代の望遠鏡製作をめぐる」(『山片蟠桃と大阪の洋学』所収)が詳しい。望遠鏡は日本へは一六一三年に初めて献上され、その後国内生産も始まった。一七九五年頃、山片重芳は珍品中の珍品である天体観測用のナクトケイキル(蘭語、夜間用望遠鏡の意)を入手したという。滑車については、明治前日本科学史刊行会編『明治前日本機械技術史』第六章「牽引機・起重機」が詳しい。
- (6) 湯城吉信「中井履軒の宇宙観—その天文関係図を読む」、湯城吉信「懷徳書院的自然科学—中井履軒対西方実学的関注」。
- (7) 中井履軒「顕微鏡記」(一七八一年)は『履軒弊帚』所収。大阪大学総合学術博物館編『「見る科学」の歴史—懷徳堂・中井履軒の目』に原文および現代語訳が見える。同書では、「顕微鏡記」を、森島中良『紅毛雑話』より六年早い、日本における最初期の顕微鏡の記録であると紹介する。一方、中井竹山「応気箚銘並序」(一七七五年)は『奠陰集(文集)』巻八所収。
- (8) 有坂隆道「豪商升屋平右衛門山片重芳の蔵書・収藏品について」上中下(『史泉』三四~三六号、関西大学史学会、一九六六~一九六七年)(有坂隆道『山片蟠桃と大阪の洋学』にも「山片重芳の蘭癖収藏品」として収録)参照。
- (9) 原文「予嘗觀於一邑子(「府下木村氏世爾」を見せ消ち)之蔵、形製較小、玻瓈自成蒜、不用銀、其餘皆同。」*木村世爾は兼葭堂のこと。なお、注8で紹介した山片家の所藏品目録の中には、温度計らしきものが所蔵されていたことが見える。(二一三頁「タルモメーテル(但蘭製刻割板アリテ跡ハ和製ナリ 則感熱舛降) *「跡」は「後(=他)」、「舛」は「升(=昇)」の誤りか?)
- (10) 「紅夷画帖記」の続きの部分は以下のようである。

予嘗聞之也、往昔夷人来寓者、覽吾邦戰陳図、問曰、「是與何國戰。」訳者答曰、「國中相戰爾。」夷人乃嘖嘖曰、「戰當係外國矣。同國之人、豈容相戰哉。我土曾無茲事。」聞者羞愧、窃嘆其雖一醜夷、而國俗茲事之美、復軼侘國矣。

今審斯帖、争乱殺傷之図、殆居大半。人物械器、旗幟服飾之等、彼此無微異、蓋皆為同國焉。豈予之前聞、出乎誤伝耶。或者其旧俗之美、今已壞而然耶。西洋之壤、雲濤万里、芒乎罔攸驗也、則是亦夢中之譚耳、姑記以貽來者。

(私はかつて以下のような話を聞いた。昔、西洋人がやってきて、我国の戦争の画を見て、「これはどの国との戦いですか」と聞いた。通訳が、「国の中でお互いに戦っているのです」と答えると、西洋人は顔をしかめて、「戦というのは外国とするものです。同じ国の人が戦うとは、私の土地ではこれまでなかったことです」と言った。聞いた人は恥じて、醜い夷人でもその国の風

習は他の国より優れているのだなと思ったということだ。

今、この帖物を見ると、争乱殺傷の画が大半を占めている。人や道具、旗や服などは違いがないので、同じ国なのであろう。以前聞いた「同国人は戦わないという」話は誤伝なのであろうか、あるいは昔のよき風習が壊れてこのようになったのであろうか。西洋の地は遠く隔たっているので、確かめようもなく、以上も夢の中の戯言に過ぎないが、書きとめて後世に残しておく。）

なお、五井蘭洲『茗話』下（六十五話）にも、「しゆてやあ」という国では建国以来六千年戦争をしていないという話が見える。

(11) 奥平俊六『懷徳堂ゆかりの絵画』ではこの画は特定できないとしつつ、背中に櫓がありその上に複数の人が載っている先例として、『象の貢献（みつぎ）』（一七二八年）に見える「住輦国大象」を挙げている。ただ、この画はインド南部にあった住輦国（チョーラ、朱羅）の様子を描いたものであり、戦いの様子を表す画でもないので、「紅夷画帖記」の象の画とは全く別物である。

(12) 中之島香雪美術館二〇一九年企画 10.12-12.8「交流の軌跡—初期洋風画から輸出漆器まで」。図録：『特別展 交流の軌跡—初期洋風画から輸出漆器まで』。記念講演会：松田清「典拠を読み解く—日欧交流史の背景」。

(13) 松田清二〇〇九年三月二一日ブログ「やせ細った蘭書—ゴットフリート『史的年代記』のこと」。

(14) 原文「ケレイキスブックに、小家の様に拵て、四方を牛生皮にて張固めたる者を象の背上に負せて其中に戦士二十五人を載て（内一人は象つかい也）敵陣え駆込術あり」。*ケレイキスブックは、W. デリヒ（デイルヒ）著『武備志（*Kriegsbuch*）』のこと（藤崎俊茂「林子平とケレイキスブック」参照）。

なお、象が戦いに使われたことについては、早くには、古代ローマのプリニウス『博物誌』巻八に象部隊のことが見える。また、前嶋信次「元代戦象考」には、インドが発祥の地であったこと、古代中国で象が使われたこと、唐以降の象が献上されたこと、『元史』に占城（チャンパ）での戦争における象の使用が見えること、マルコポーロが記録する元朝における象の軍事利用（象の背に檣を載せ、十二人の戦士が乗ったこと）など実に興味深い内容が紹介されている。

(15) 中井竹山の師、五井蘭洲は『新題和歌百首』の中で、「眼鏡」「千里鏡（望遠鏡）」「鳥銃（鉄砲）」「自鳴鐘（時計）」など新しい事物を題に和歌を詠んでいる。そして、その師の跡を継いで、竹山は同題で漢詩を作っている（「和歌新題百首詩」（『奠陰集（詩集）』巻二所収）。いずれも西洋の文物の精密さへの驚きを詠っており興味深いが、以下、「千里鏡（望遠鏡）」だけを紹介する。

「抽筒龍彩揺、縮地仙符授、懸向海西天、折衝殊域寇。」

*自注「長崎辺漳架千里鏡、日窺海上外舶、以備不虞云。」

（筒を伸ばして美しい模様を揺らせば、遠くを近くに持ってくるという伝説の術を授かった。西の海に向かって設置して、外国の敵がやってくるのを撃退しよう。）

自注は、長崎の辺境で望遠鏡を設置して海上の外国船を見張って不測の事態に備えているこ

とを言う。当時、長崎には外国船を見張る「遠見番」があり、権現山の野母遠見番所など四か所の番所が設けられていた。野母遠見番所には遠眼鏡が十挺あり、五十里見通せたという(旗先好紀『天領長崎秘録』七章「遠見番」参照)。その他、一六四〇年のポルトガル船入港事件を受け、福岡藩と佐賀藩が隔年で長崎の警備にあたった。また、一六五三年には、平戸藩に命じて長崎港内外の八か所に台場を築造させた。魚見岳台場からは海が見渡せた。だが、幕末の一八〇八年にはイギリス軍艦が入港するフェートン号事件が起き、一八四八年にもまたイギリス船が来たことがあった(江越弘人『〈トピックスで読む〉長崎の歴史』「沖の千人番所と台場」(一六四一))。大井昇『長崎絵図帖の世界』には台場の地図が見える(同書一二一頁)。

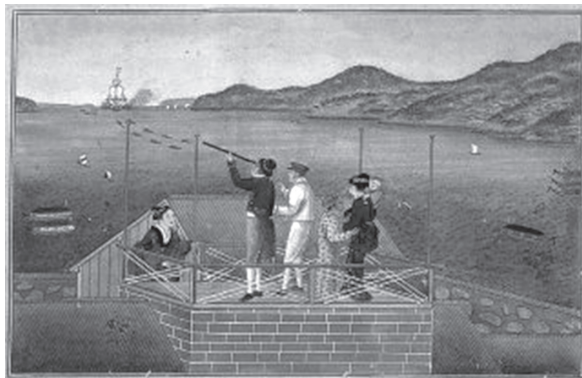


図6 物見台から望遠鏡で船の入港を望むオランダ人
(長崎歴史文化博物館蔵『唐蘭館絵巻』)

参考文献

奥平俊六『懷徳堂ゆかりの絵画』(大阪大学出版会、二〇一二年)

大阪大学総合学術博物館編『「見る科学」の歴史—懷徳堂・中井履軒の目』(大阪大学出版会、二〇〇六年)

有坂隆道『山片蟠桃と大阪の洋学』(創元社、二〇〇五年)

明治前日本科学史刊行会編『明治前日本機械技術史』(日本学術振興会、一九七三年)

中之島香雪美術館編『特別展 交流の軌跡—初期洋風画から輸出漆器まで』(中之島香雪美術館、二〇一九年)

蕭雲從『欽定補繪蕭雲從離騷全図』(『四庫全書珍本』六集第二四一冊)

吉岡幸雄編『日本の意匠』13巻「吉祥」(京都書院、一九八六年) *図3-2が見える。

中井竹山『奠陰集』(手稿本は大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵) *ペリかん社から影印本が出ている(近世儒家文集集成8) 他、懷徳堂遺書に活字本がある。

中井履軒『履軒古風』(手稿本は大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵)

五井蘭洲『茗話』(写本(三冊本)は大阪大学附属図書館所蔵)

林子平『海国兵談』 *岩波文庫などにある。

藤崎俊茂「林子平とケレイキスブック」(『書齋』三五(第四卷第六号)、三省堂、一九四〇年)

『プリニウス博物誌』(雄山閣、一九八六年)

前嶋信次「元代戦象考」(三田史学会『史学』第四〇卷第二・三号、一九六七年)

簗先好紀『天領長崎秘録』(長崎文献社、二〇〇四年)

江越弘人『<トピックスで読む>長崎の歴史』(弦書房、二〇〇七年)

大井昇『長崎絵図帖の世界』(長崎文献社、二〇一八年)

原剛『幕末海防史の研究』(名著出版、一九八八年)

寺門日出男「中井竹山・中井履軒の贋作書画について」(『懷徳』七九号、懷徳堂記念会、二〇一一年)

湯城吉信「ジラフがキリンと呼ばれた理由—中国の場合、日本の場合(麒麟を巡る名物学 その一)」
(大阪府立大学人文学会『人文学論集』二六号、二〇〇八年)

湯城吉信「中井履軒の宇宙観—その天文関係図を読む」(『日本中国学会報』五七号、二〇〇五年)

湯城吉信「懷徳書院の自然科学—中井履軒対西方実学的関注」(『第八屆東亞書院国際學術研討会暨
二〇一九年中国書院学会年会論文集』、中国書院学会、二〇一九年)

〔附記〕

本稿脱稿後、岡田裕成「《レパント戦闘図屏風》：主題同定と制作環境の再検討」(『香雪美術館研究紀要』二号(香雪美術館、二〇一九年))があることを知った。本稿で扱った「レパント戦闘図屏風」は、レパントの海戦ではなく、チュニス戦役を主題とするものだと論じている。